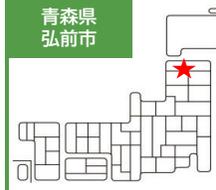


農業者と障害者等のマッチングに取り組み、独自のマニュアルや支援制度等を整備。不登校傾向等にある児童生徒や特別支援学校の生徒向けの農業体験も実施。

地方自治体

青森県
弘前市



きっかけ

H31年

弘前市のりんご園で蔓延したりんご黒星病について、労働力不足に対応しきれなかった農家と福祉事業所が連携して対応したことがきっかけとなり、市として農福連携を後押し。

人を耕す

- 農業者から作業の留意点や細分化の内容を聞き取り、R5年度に独自の「農福連携実践マニュアル」を作成。りんご作業16項目について、農業者が作業依頼する際のアドバイス等を掲載したほか、作業細分化により、障害者が従事可能な作業を整理。
- 農作業に引率する支援員には、農作業の指示だけでなく、安全管理等が適切に行われるよう指導。

地域を耕す

- 農福連携の普及のため、市独自の支援制度として、R5年度から新たに農福連携に取り組む農業者を支援する「お試しノウフク」、障害者の農作業の様子や受入れの工夫を発信する「シェアノウフク」、特別支援学校の生徒に対する農作業体験を実施。
- R6年度からは新たに不登校傾向にある児童生徒に対する農作業体験を実施。

未来を耕す

- マニュアル作成などの取組が注目され、県内外からの行政関係者や大学等の視察が増加。併せて、県主催の研修会などに講師として招かれる機会も増加。
- 室内でりんごの袋掛けを練習できるキットを福祉事業者へ貸し出しており、事前練習により心理的負担の軽減につながっていると好評を得ている。

基本情報

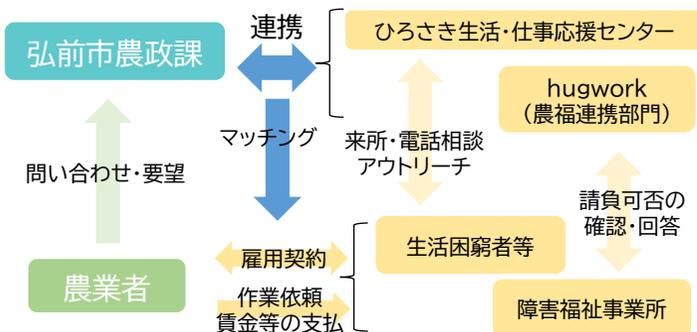
農福連携取組開始: R元年

取得認証等: SDGs未来都市

概要

主力商品
(農作物)
りんご、ピーマン、トマト、ミニトマト、落花生、えだまめ、にんにく
特徴的な取組
中間支援

体制図



成果

農作業に関わった障害者数	農福連携の支援制度を活用した農家数	農福連携で実施した作物数	農福連携で実施した作業内容
24人(R元) →2,426人(R5) ※年間のべ人数	2人(R元) →20人(R5)	1種類(R元) →7種類(R5)	1作業(R元) →31作業(R5)

- 支援制度を活用して農福連携に取り組んだ農業者はのべ60名となり、事業終了後も短期雇用を継続しており、農家2戸が障害者計4名を常時雇用。
- 農福連携の推進により、障害者が作業しやすいよう、新たに加工用りんごのほ場を整備する農業者や、省力樹形である高密度植栽培を行うほ場での作業を依頼する農業者もいる。
- 市内農業者が市外の福祉事業者と連携するなど、地域外とのつながりを創出。
- 障害者がりんごの栽培からジュースのラベル貼り、販売まで携わるなど、6次産業化の事例も確認。

TEL/0172-40-7102 Mail/nousei@city.hirosaki.lg.jp

視察受入れ: 可 / 報道機関受入れ: 可

更新年度: R7.1

除草剤を使用せず無化学肥料で食用バラを栽培し、施設外就労を活用して生産規模を拡大し、花きとして初となるノウフクJASを取得。農福連携に取り組む食用バラ農家の育成を実施。

農業経営体

山形県
村山市



基本情報

設立:H23年/農福連携取組開始:R4年

取得認証等:ノウフクJAS

きっかけ

R4年

山形県での就農直後に、バラの作業時期と地域特産のさくらんぼの収穫時期が被り、労働力の確保が困難に。市の紹介で施設外就労の受け入れを始めたところ、障害者の丁寧な仕事ぶりを目の当たりにし、本格的な受け入れを決め、加工作業の依頼を開始。

人を耕す

- 障害者のスキルアップにより、工賃が時給換算で前年比10%増になり、就労継続支援B型事業所への平均月間支払額も114,951円に上昇。
- スマート農業等の機械操作や、安全管理の講習会を実施し、障害者が機械作業で活躍。作業ごとにリーダーが出るなど技術が向上。

取組

地域を耕す

- 地域農業の担い手として研修会に登壇し、施設外就労の受け入れにより規模拡大したことを発信。
- 特別支援学校からの実習生の受け入れを実施。
- 村山市で農福連携が広がり、障害者の受け入れが進む。

未来を耕す

- 除草剤を使用せず無化学肥料での食用バラの栽培を開始。施設外就労により、障害者が90%以上の農作業を担い、経営が安定。
- 食用バラ農家の育成にも力を入れており、循環型無農薬露地栽培・農福連携・6次産業化・スマート農業による経営モデルを全国へ発信。

概要

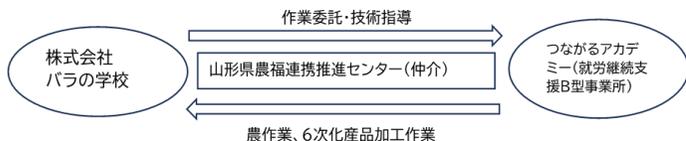
主力商品

(農作物)バラ
(加工品)食用バラ加工品

特徴的な取組

有機農業、スマート農業

体制図



成果

事業所への年間支払額	施設外就労年間のべ人数	農業収入	農地面積
2千円(R4) → 530千円(R5)	26人(R元) →728人(R5)	7,400千円(R元) → 47,240千円(R5)	16a(R元) →50a(R5)

- 花きとして全国初となるノウフクJAS取得によりエシカル消費を意識する購買者に訴求し、収益が改善。
- メディアで取り上げられたことで、高級レストランなどからの引き合いが増え、販路が急速に拡大。
- 全国から視察が増加し、「農福連携×食用バラ」の認知が広がったほか、農福連携による食用バラの栽培を障害者就労施設5社が開始。

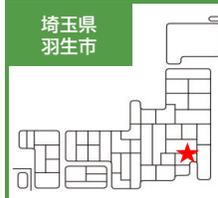
TEL:090-1373-3200/Mail:t.nakai@baranogakkou.co.jp

視察受入れ:可 / 報道機関受入れ:可

更新年度:R7.1

特別支援学校

埼玉県
羽生市



農業コースの生徒が農業者の指導による農産物の生産、企業等との連携による新商品の開発・販売を通じて、農業への知識・技能を深め、社会に貢献できる人材育成を目指す取組を実施。



基本情報

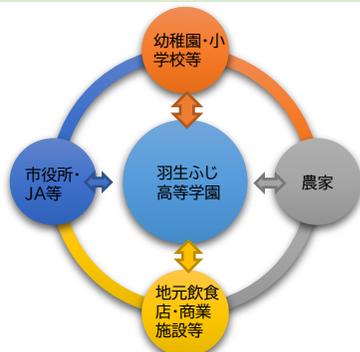
設立:H19年/農福連携取組開始:H19年
取得認証等:S-GAP※埼玉県独自のGAP

主力商品

(農作物)モロヘイヤ、トマト、いちご
(加工品)にんにく味噌、ビール

概要

体制図



TEL:048-560-2020 Mail:otuka.syunta.57@spec.ed.jp

きっかけ

H19年

高等部の職業教育の強化のために設置された学校。知的障害を持つ生徒の特性等が農業実習に適していることもあり、農業技術科を設け生徒の能力を引き出す取組を開始。

取組

人を耕す

- 地域の生産者からそばやトマト栽培等の直接指導を受け、生徒自身のコミュニケーション能力の向上や、知識や技能の定着を実現。
- 生産した農産物を使った商品を生徒が企画立案し、地域の加工業者と連携して、加工品を製造。

地域を耕す

- 開校当初より5戸の農家から学校周辺の遊休農地を借用。実習で年間を通して農産物を生産しており、生徒たちの技能向上に寄与。
- 地域飲食店・学校給食関係からの依頼で、モロヘイヤを栽培・提供するほか、規格外の農産物を活用した商品の開発・販売を実施。

未来を耕す

- 地域の特産品を活かした「モロヘイヤうどん」やビールの製造等、地元企業や行政、JA、農業高校等と連携した商品開発により、障害者の就労の場を設けることと同時に、フードロス問題の解消や付加価値の向上も実現。
- 近隣農家、JA、県農林振興センター、盆栽家等、様々な専門家による出前授業を実施。

成果

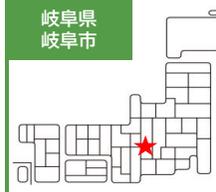
生徒数	年間売上高	温室・作業室当面積	耕地面積
30人(R5) ※1学年10人	20万円(H19) →70万円(R5) ※90万円(コロナ前)	11.8a(R5)	36.7a(R5)

- 農業実習を通して、2年生以降、作業機械の取扱いを学ぶとともに、小型系建設機械免許を11名が、フォークリフト資格を17名が取得。
- 生徒が校内外のイベント販売により、加工品にした時の付加価値の向上も同時に体験することで、社会に提供する喜びと責任感を体感。
- 県農林振興センターと連携し、R2年にS-GAP認証を取得。農作業を展開する上で安全面での生徒の意識向上に寄与。

JAぎふの特例子会社として、荒廃農地での農業再生に向けた取組、ユニバーサル体験農園の実施、地域の企業と連携した特産品の開発などで地域に貢献。

特例子会社

岐阜県
岐阜市



きっかけ

R2年

JAぎふの経営理念である「すべては組合員と共に」を基に、特例子会社を設立。荒廃農地を活用し、1haの農地で農作物を栽培するほか、地域が抱える様々な問題を解決するべく活動。

基本情報

設立:R2年/農福連携取組開始:R2年

概要

主力商品
(農作物)にら、まくわうり、じゃがいも、さつまいも、さといも、米等
(加工品)冷凍いちご、まめなかな味噌、ハイビスカスティー、岐阜ずんだ大福

特徴的な取組
スマート農業、ユニバーサル農園

人を耕す

- 雇用する障害者18名は、農作物の栽培、えだまめ選果場、産直市場等で勤務。個性を發揮できるような人材配置と、定期面談の実施等により雇用の安定を実現。
- 金融事業も行うJAの子会社である特性を活かし、社員の資産管理等の相談を受ける。社員農業研修や各種資格取得の奨励も行い、働きたくなる職場づくりを実践。

取組

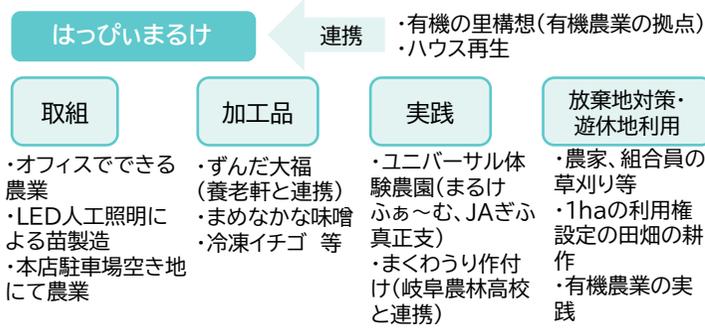
地域を耕す

- JAぎふ女性部から「まめなかな味噌」加工事業を引き継いだほか、地域の伝統野菜である「まくわうり」の生産や荒廃農地の除草作業の請負等、地域農業の維持に貢献。
- 障害者の社員が栽培指導するユニバーサル体験農園「まるけふあ〜む」の実施や、特別支援学校から実習生の受入れ等、精力的に農福連携を推進。

未来を耕す

- JAぎふ及びぎふ農福連携推進センターと連携し、自社の岐阜県農業ジョブコーチが、農家と福祉事業所のマッチングを支援するほか、岐阜刑務所と連携し、受刑者に対する農業指導も実施。
- 冷凍いちごや味噌、ハイビスカスティーなど、地域の農産物を活用して6次化商品を開発。

体制図



成果

障害者の平均賃金月額	売上高	農地面積	荒廃農地の除草作業請負
115,930円(R2) →152,582円(R5)	1,980万円(R2) →5,450万円(R5)	0.5ha(R2) →1ha(R5)	1件(R2) →3件(R5)

- 雇用した障害者の中には、プレイングマネージャーに昇格した後、社会福祉士の資格を取得し、一般企業へ就職した事例もある。
- JAぎふから県の産品であるえだまめの規格外品のむき身作業を請け負うほか、そのえだまめを用いて、企業間連携により「岐阜ずんだ大福」を開発。
- 地域の伝統野菜である「まくわうり」の原種苗を岐阜農林高校から譲り受けて栽培し、岐阜農林高校で加工した「まくわうリアイス」を皇室に献上。

080-4052-7604 / 68002@jagifu.giadc.jp

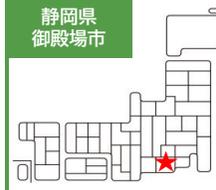
http://happymaruke.jp/index.html

視察受入れ:可 / 報道機関受入れ:可

障害者就労施設が、水耕栽培に取り組み、毎日安定出荷することで高工賃を実現。地域のスーパーとの取引拡大により、第2農場を建設するなど規模拡大を実現。

福祉事業所

静岡県
御殿場市



きっかけ

H9年

開所当初から農業に取り組んできたが、H24年から天候に左右されず、障害者に毎日同じ作業環境を用意できる水耕栽培を導入。

基本情報

設立:H18年/農福連携取組開始:H9年

取得認証等:しずおか農林水産物認証

人を耕す

- 58名の利用者のほとんどが農業に従事し、H24年から水耕栽培を導入。
- 水耕栽培により安定出荷を実現し、毎日600~1,000株を地域のスーパーに出荷。
- 利用者数は倍増し、すべての作業ができる利用者(エキスパート)を育成して職員不在時の作業を確保。3名は一般企業に就労。

地域を耕す

- 水耕栽培ではリーフレタスを中心に、R5年には第2農場を設立し、サンチュやルッコラなどを通年で栽培。地域イベントや食育活動にも参加。
- 担い手が高齢化した茶畑の管理を請け負い、障害者が作業を行い、茶葉を販売して工賃向上を目指す。新たに粉茶やクッキーも開発。
- 農福連携を開始以来、静岡県内で福祉モデルとして多くの講演を行う。

未来を耕す

- 商品の品質向上に向けて、消費者目線を重視し、商品規格やパッケージングについての研修を実施。
- 御殿場市内の学校給食センターにリーフレタスを納品。

概要

主力商品

(農作物)リーフレタス、サンチュ、ルッコラ 等
(加工品)粉茶、クッキー、食パン、濃厚茶みつ、レタスふりかけ

体制図

社会福祉法人 ステップ・ワン

ゆめ農

連携

NPO法人
オールしずおかベストコミュニティ

販売

イオングループ マックスバリュ東海

取組

成果

平均工賃月額

8,000円(H9)
→60,000円(R5)

障害者数

15人(H9)
→40人(R5)

農業売上

6,000千円(H9)
→19,438千円(R5)

農地面積

0.03ha(H9)
→2.5ha(R5)

- 地域のお祭りや農福マルシェ、市役所マルシェ等に積極的に参加。近隣の幼稚園とは夏野菜の苗を「お買い物ごっこ」形式で販売し、食育を促進。
- 毎日同じ作業ができる環境(水耕栽培)を整備することで、生産性が向上。
- 茶葉を粉末にした6次化商品などを開発・販売。

TEL:0550-82-0980 Mail:Step.one813gogo@gmail.com

<https://gotemba-stepone.jimdofree.com/>

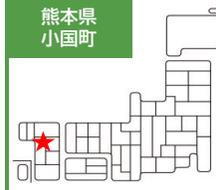
視察受入れ:可 / 報道機関受入れ:可

更新年度:R7.1

荒廃農地を活用した大豆栽培、豆腐製造、おからを餌にした養鶏事業、食肉加工、直売所やレストランの運営等の多角化により、障害特性に応じて働ける場を創出。

福祉事業所

熊本県
小国町



基本情報

設立:H2年/農福連携取組開始:H28年

取得認証等:認定農業者

きっかけ

H28年

地域の基幹産業であった農林業や地場産業の衰退に伴い、障害者の居場所づくりのため、荒廃農地を活用した6次産業化プロジェクトを開始。循環型農業と共生社会の確立が目標。

人を耕す

- 希少大豆の栽培、鶏卵事業、食肉加工、OEM提携による納豆・味噌の販売、シフォンケーキ等の製造販売、「農福連携レストラン」や農産物直売所の運営等、多彩な作業工程と販路拡大により、障害者の所得向上を実現。
- 作業工程ごとのリーダー配置により役割分担を明確にするとともに、障害特性に応じてわかりやすい指示・提示を行うことなどにより、安全や健康管理に努め、働きやすい職場環境を維持。

地域を耕す

- 小国町で発見された在来種「おぐに黒大豆」を継承して量産化。きな粉や地元レストランの食材として活用。
- 小国町産業課とも連携し、農福連携事業を通じた雇用創出と地域活性化の取組を実施。

未来を耕す

- 豆腐等製造時に排出されるおからやレストランでの残飯、規格外の野菜などを餌に鶏卵事業を開始。鶏糞は、荒廃農地に散布。廃鶏は、食肉用に加工して活用する循環型農業を確立。
- 地域の高齢者と障害者それぞれが支え合う地域共生社会の仕組みを実現。

概要

主力商品

(農作物)大豆(すずかれん、おぐに黒大豆)、鶏卵 等
(加工品)納豆、味噌、シフォンケーキ、豆乳プリン 等

特徴的な取組

環境保全型農業

取組

成果

平均賃金・工賃月額	障害者数	売上高	荒廃農地借用面積
A型:45,058円(H28) →120,611円(R5) B型:10,000円(H28) →25,316円(R5)	A型:4人(H28) →16人(R5) B型:19人(H28) →36人(R5)	A型:15,725千円(H28) →96,052千円(R5) B型:6,879千円(H28) →31,347千円(R5)	1ha(H28) →10ha(R5)

- 荒廃農地を活用した希少大豆の栽培で、大豆製品の6次産業化とブランド化に取り組むことで収益性や生産性の向上を図る。
- 製材所に2名、県立高校に1名の一般就労を実現。就労継続支援B型事業所からA型事業所に3名が移籍。
- 「農福連携レストラン」、平飼い農園、移動販売車、食肉加工事業と年々事業を拡大。
- 交流人口は取組開始当初の3,000人からR5年には148,000人に増加。

体制図

社会福祉法人
小国町社会福祉協議会

第二悠愛グループホーム事業所
(小国郷内に21か所が点在)
就労継続支援B型事業所
大豆工房小国のゆめ
農福連携レストラン天空の豆畑、平飼い農園おぐにん卵、悠工房食肉加工場
就労継続支援A型事業所
就労支援センター陽なたぼっこ
農福連携レストランすずかれん、農産物直売所結菱(むすびし)、移動販売車陽なたぼっこ号

TEL / 0967-46-2616 Mail / mukuno@with-yuuuai.or.jp

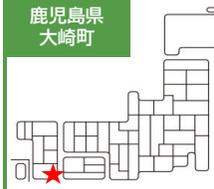
視察受入れ:可 / 報道機関受入れ:可

更新年度:R7.1

障害者就労施設、加工業者等が連携し、地域の高齢者や障害者が放置竹林の整備や竹炭の製造を行うモデルを創出。竹炭を土壌改良材として活用したさつまいもの加工により収益化を実現。

その他

鹿児島県
大崎町



きっかけ

R4年

聴覚障害のある地域おこし研究員の「高齢者や障害者の就労意欲を引き出し、社会参加と生きがいづくりの場を作り出す」という呼びかけに応じ、関係者で連携体制を構築。

人を耕す

- 竹林整備に参加する障害者の工賃は、全国平均を上回る時給600円(R5)に向上。参加者からは「考えながら竹を切るところが楽しかった」などの声があり、障害者の働きがいに寄与。
- 障害者や高齢者等のべ267名(R5)が放置竹林の整備や竹材加工の担い手として活躍。
- 「竹林整備」という共通の仕事をする事で、協働が促進される包摂の空間を創出。

地域を耕す

- 無価値とされた竹を竹炭として販売するほか、特産品「愛生会の干し芋」の製造販売によりさつまいもの収益性を高め、大崎町への経済効果の向上に貢献。
- 輸入物価高騰を背景とした畜産農家における敷料としての竹炭活用のほか、食品加工業者や酒造会社と連携した商品開発等を行い、地域活性化に貢献。
- R5年からは幼竹を塩蔵メンマにする取組をスタート。

取組

未来を耕す

- 施設利用者や地域住民が、放置竹林の拡大という社会的課題を解決するという共通の目標を共有し、必要な存在としての「役割」を取得・遂行・承認される機会を創出。
- 県広報、新聞への掲載等、積極的な情報発信により、他地域への普及展開を目指す。

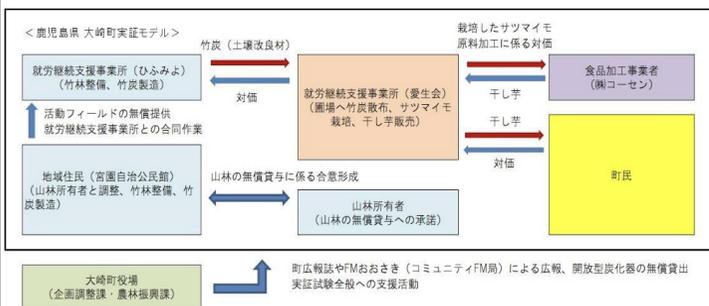
基本情報

設立:R4年/農福連携取組開始:R4年

概要

主力商品
(農作物)さつまいも、たけのこ
(加工品)干し芋、焼酎、塩蔵メンマ

体制図



成果

障害者就労施設数

2事業所(R4)
→3事業所(R5)

竹林整備に関わる障害者数

267人/ 20日(R5)
※のべ人数

放置竹林の解消面積

30a(R4)
→60a(R5)

竹炭散布面積

5a(R4)
→33a(R5)

- 地域の高齢者からは、「今後も来てほしい」などの声があり、竹林整備に参加する障害者を仲間として受け入れている。
- 干し芋の売上高は、256,000円(R4)から854,800円(R5)に増加。
- ひきこもりの状態にある者が、2か月間参加し、その後農業関連会社に一般就労。
- 障害者や高齢者等が放置竹林の整備や竹材加工の担い手となり、放置竹林の解消を実現。
- 竹福商連携による竹の資源化モデルが薩摩川内市、山口県山口市にも波及。

にたいどっこい 代表 中野ひとみ

TEL / 090-5284-8704 Mail / nitaidokkoi@gmail.com

視察受入れ:可 / 報道機関受入れ:可

更新年度:R7.1